

『世説新語』における王羲之と謝安

はじめに

『世説新語』は、五世紀の中頃、東晋時代に続く南朝の劉宋（420～479）の時代、武帝の劉裕の甥である臨川王劉義慶（403～444）によって編纂されたと言われる。

『世説新語』は、『隋書』経籍志の子部小説家類に

世説八卷、宋臨川王義慶撰、世説十卷、梁劉孝標注。

とある。即ち、『隋書』が編纂された頃（唐の太宗の頃）は、『世説新語』は『世説』と呼ばれていた。

その後、唐の段成式（？～863）の『酉陽雜俎』には『世説新書』、また、わが国に平安朝から伝えられた唐の写本残巻も『世説新書』と称されていた。また、南宋の汪藻の『世説叙録』によれば、はじめは『世説』とのみ呼ばれていたが、六世紀頃、

塚 本 宏

六朝の梁、陳の頃に『世説新書』と改題されたとある。もともと漢の劉向に『世説』という著書があったので、それと区別するために劉義慶の『世説』を『世説新書』と改めたと黄伯思の『東觀余論』にある。そして、劉知幾（661～721）の『史通』に「劉義慶『世説新語』」とあるところから、唐の中頃から『世説新語』と呼ばれていたということである。

現行の『世説新語』（以下略して『世説』と称す）は、小話集の形式をとり、全体を上・中・下の三巻に分け、内容によって三十六篇に分類し、全体で一一三〇話のエピソード、延べ七八八人の登場人物によって構成されている。

その中で王羲之に関する小話は全部で四六話掲載（次頁の表参照）されていて、全体の小話数（一一三〇話）の四、〇％となり、同じ四六話の東晋の征南大將軍、江州刺史を歴任し、謀

反を起して失敗した義之の伯父の王敦(266～324)と共に十位である。この義之の数字は意外と高く、『世説』中の登場人物を数える作業を通して、義之の存在の重さを見直すことを余儀された数である。そして、一位は侍中、吏部尚書、尚書僕射、太保などを歴任した謝安(320～385)で、一一四話(二〇、二%)、二位は荊州刺史、征西大將軍、大司馬の桓温(312～373)で、九四話(八、三%)、三位は丞相、太傅で、東晋の元帝司馬睿を補佐した王導(267～330)で、八七話(七、七%)、四位は清談の名手の劉惔で、七六話(六、七%)、五位は中書令、予州刺史、江荆予三州刺史の庾亮(289～340)で、五九話(五、二%)と続いている。

さて、本稿は十位の王羲之と一位の謝安との関係を『世説』の中で探り、両者の人間性などを中心に考察を加えていきたい。

一

『世説』の篇者劉義慶については、『宋書』卷五十一宗室伝、『南史』卷十三宋宗室諸王伝に詳しい。『宋書』には

義慶出繼臨川烈武王道規。以長沙景王第二子義慶為嗣。初太祖少為道規所養高祖命紹焉。咸以禮無二繼。太祖還本而定義慶為荊州廟主、當隨往江陵。太祖詔曰、褒崇道勲經國之盛典、尊親追遠因心之所隆。

とある。

また、『南史』には

臨川王無子、以長沙景王第二子義慶嗣。初文帝少為道規所養、武帝命紹焉。咸以禮無二繼。文帝還本、而定義慶為後。義慶為荊州廟主當隨往江陵。文帝下詔褒美勲德及慈蔭之重、追崇丞相加殊禮。(中略)義慶幼為武帝所知、年十三襲封南郡公。永初元年襲封臨川王。元嘉中為丹楊尹。(中略)元嘉九年、出為平西將軍荊州刺史加都督。荊州居上流之重、資實兵甲、居朝廷之半。故武帝諸子偏居之。義慶以宗室令美。故特有此授。性謙虛、始至及去鎮、迎送物並不受。(中略)並有辭章之美、引為佐吏國臣、所著世説十卷。撰集林二百卷。並行於世。文帝每與義慶書、常加意斟酌。(後略)

とある。劉義慶は武帝の末弟の臨川王劉道規に子がなかったの、その養子となって臨川王を継いだ。そして、侍中、丹陽尹、中書令などの中央の要職を歴任し、後に地方では荊州刺史、江州刺史を経て開府儀同三司を歴任し、文帝の元嘉二十一年(444)に都で病死した。

さて、『世説』における王羲之と謝安の関係は、次表(表1)によってその全貌がわかるが、この表でわかる二人の接点は、※印の十一話の小話の中にお互いに登場して、そこで会話を交わしているということである。謝安は全部で一一四話あるが、

表1 『世説新語』の中の王羲之と謝安

(注)	合計	卷																							中										卷					上		卷	卷						
		下											卷												中										卷					上		卷	卷						
両者の小話欄の数字は小話の番号を表す ※印は両者がそれぞれに登場する小話	36篇	8	7	8	17	4	8	12	9	9	14	33	65	17	54	6	14	11	32	17	19	6	2	39	13	7	7	27	88	156	28	42	66	104	26	108	47話	小話数	王	義	之	の	小	話	(小話数)	登場人物			
	1130話	5					2	12			7	5・8・19・20	54・63						25・※26・31	6		3		24・26・30				20	28・29・30・47・※55・※62・※75・※85	55・72・※77・80・88・92・96・100・108・120・※141	19・※28	25・※61	36		※62・69・※70	(3話)	3名	謝	安	の	小	話	(小話数)	登場人物					
	46話	(1)					(1)	(1)			(1)	(4)	(2)						(3)	(1)		(1)		(3)				(1)	(8)	(11)																			
	71名	1					1	1			2	7	3						7	1		1		5				2	14	16		2	3	2		3名	33・34・36	※62・※70・71・75・78・90・92	(3話)	3名	登場人物								
	114話			5	14		6				14	17・23・24・27・29	26・27・32・38・39・45・55	9・12・14・42	38・40・41・42		7		23・※26	12	15			34・36・37		6		21・27	78・82・84・※85・87	45・46・52・※55・57	143・146・147・148	63・76・77	21・24	27・※28・29・30・33・34・35・37	18・55・60・※61・62	24・39・48・52・55・56・79・82・87・94	23	※62・※70・71・75・78・90・92	(7)	13名	登場人物								
	245名			2	1		3				1	14	12	5	11		1		9	2	4			6	1	2		3	70	34	2	14	14	16	2	13	3名												

表2 謝安の小話の登場人物

篇名	謝安の小話の登場人物名(数字は小話の番号)
德行第一	33謝奕・34褚裒・36劉夫人
言語第二	62王羲之・70王羲之・71謝奕・謝朗・謝奕・謝道韞・75郝超・78司馬炎・謝玄・90謝石・車胤・袁羊・92謝玄
政事第三	23(兵卒・下僕)無名
文学第四	24阮裕・39支遁・謝朗・48殷浩・52謝玄・55支遁・許詢・56殷浩・孫盛・王濛・79庾闡・庾亮・82陸退・張憑・87桓溫・94袁宏
方正第五	18盧志・陸機・陸遜・陸抗・盧毓・盧瑱・陸雲・55桓溫・桓伊・謝萬・60羊綏・61王羲之・阮裕・62王獻之
雅量第六	27桓溫・郝超・王坦之・28孫綽・王羲之・29桓溫・王坦之・30王坦之・郝超・33謝奉・桓溫・34戴逵・35謝玄・37王獻之
識鑒第七	21司馬昱・24褚爽
賞譽第八	63楊朗・蔡謨・76王濛・王脩・77王羲之・劉惔・78王述・97謝鯤・101桓溫・102桓溫・趙悅子・105桓玄・116劉惔・125王胡之・128王坦之・129王胡之・131劉惔・王胡之・133王濛・139謝朗・王堪・阮瞻・潘岳・許允・140鄧攸・141王羲之・王洽・143王恭・王述・146謝玄・劉惔・王獻之・147王珣・148王獻之
品藻第九	45桓溫・孔巖・殷仲文・46謝玄・謝朗・李充・李重・樂廣・司馬倫・52桓溫・王坦之・55王羲之・許詢・謝萬・57蘇紹・蘇則・蘇愉・石崇・59孫統・謝奕・陳達・60支遁・王胡之・謝萬・62郝超・王羲之・嘉賓・67郝超・支遁・嵇康・殷浩・69衛永・蕭輪・孫騰・殷融・70王獻之・支遁・庾亮・71謝玄・73王恭・劉惔・王濛・74王徽之・王操之・王獻之・75王獻之・王羲之・69衛永・蕭輪・孫遁・王濛・劉惔・77王獻之・王濛・劉惔・78王恭・王濛・劉惔・82王獻之・郝超・庾亮・84王恭・王濛・劉惔・85王恭・支遁・王羲之・王胡之・87桓玄・劉瑾・王獻之
規箴第一〇	21謝萬・27桓玄・謝混
夙慧第一二	6司馬曜・司馬昱
豪爽第一三	12王胡之
容止第一四	34司馬昱・桓溫・王珣・36謝玄・37支遁・孫綽
傷逝第一七	15王珣・王獻之・刁約・謝琰
棲逸第一八	12戴逵・戴逵
賢媛第一九	23劉夫人・26謝道韞・王凝之・王羲之・謝萬・謝韶・謝朗・謝玄・謝淵
巧芸第二一	7顧愷之
任誕第二三	38桓沖・張玄・劉麟之・王坦之・40劉惔・41羅友・桓溫・司馬昱・魏舒・桓豁・42桓伊
簡傲第二四	9謝萬・阮裕・12謝萬・王恬・14謝萬
排調第二五	26桓溫・高崧・27劉夫人・32桓溫・郝隆・38桓溫・司馬奕・司馬昱・39郝曇・王脩・45王徽之・55謝遏
輕詆第二六	17孫綽・劉夫人・劉惔・23謝萬・謝玄・24庾亮・裴啓・支遁・王珣・27殷顗・庾恒・謝尚・29苻宏・王徽之
佞諂第二七	14謝玄
忿狷第三一	6王獻之・習鑿齒・謝朗
尤悔第三三	14謝奕
糺漏第三四	5謝奕・謝朗

表3 謝安の小話中の登場人物の小話数

順	登場人物	小話数	順	登場人物	小話数	順	登場人物	小話数	順	登場人物	小話数
1	桓温	14話 (12.3%)	8	王濛	8 (7.0)	15	王珣	4 (3.5)	18	孫綽	3 (2.6)
2	王献之	12 (10.5%)	9	謝朗	7 (6.1)	15	謝奕	4 (3.5)	23	王脩	2 (1.8)
3	謝玄	11 (9.6)	10	王恭	6 (5.3)	15	劉夫人	4 (3.5)	23	王述	2 (1.8)
3	劉惔	11 (9.6)	10	王坦之	6 (5.3)	18	殷浩	3 (2.6)	23	桓伊	2 (1.8)
3	王羲之	11 (9.6)	10	王胡之	6 (5.3)	18	王徽之	3 (2.6)	23	許詢	2 (1.8)
6	謝万	9 (7.9)	10	郗超	6 (5.3)	18	阮裕	3 (2.6)	23	謝掇	2 (1.8)
6	支遁	9 (7.9)	14	司馬昱	5 (4.4)	18	桓玄	3 (2.6)	23	謝道蘊	2 (1.8)
(以下小話数1話76名省略)											
			32	王洽	1 (0.9)						
			23	庾敳	2 (1.8)						
			23	庾亮	2 (1.8)						
			23	戴逵	2 (1.8)						

その中で十一話に羲之が登場しているということは決して少ない数ではない。

二

また、次の表2は、謝安の小話に登場した人物のリストである。人物名の上の数字は、各篇の中の小話の番号である。表3は、謝安の小話の中に登場する人物の小話数をまとめたもので、率(謝安の小話総数一一四話に対する数字である。順位を見ていくと、一位が桓温で一四話(12.3%)、二位が王献之で一二話(10.5%)、三位は謝玄・劉惔・王羲之で一話(9.6%)である。この表からは桓温が最も謝安に接近し、親しかったと『世説』の小話数から言い切ることができる。そして、二位が王羲之の子の王献之だということは意外なことであり、

三位は謝玄・劉惔・王羲之の三名であることも意外である。

王羲之と謝安が揃って登場する小話から考察していくと、まず『世説』言語第二62に

謝太傅、王右軍に語りて曰く、「中年にして哀楽に傷み、親友と別るれば、すなわち数日の要を作す」と。王曰く、「年、桑榆に在れば自然に此に至る。正に糸竹に頼りて陶写するも、恒に兎兎の覚りて、欣楽の趣を損せんことを恐る」と。

とある。謝安はここでは「中年になると」ということで、中年の哀楽やその時の晴れない気分について羲之に語りかけている

が、それに応えて義之は「晩年になると」ということで、自分の子供への気の遣い方や心配について語っている。謝安の「中年」という問いかけに対して、「晩年」と義之が応えているということは、義之は謝安よりも十四歳年上ということから言い表わされていると見てよいのであろうか。「中年」と「晩年」というそれぞれの意識の違いが、この年令差によって表されていると言える。しかし、年令差はあっても、悩みや心配事の内容はほとんど似ている所は興味深い点である。また義之の言の中に「晩年になるとどうしても自然に哀楽の情にもろくなったり、気分が晴れなかつたり」と受けて、「自然に」感情が動いてしまつて自分の意志でコントロールできないという自分の持っている弱みをも語っているのであろう。

次に、同じ言語第二70に

王右軍、謝太傅と共に冶城に登る。謝、悠然として遠く想い、高世の志有り。王、謝に謂いて曰く、「夏禹は勤王して、手足胼胝し、文王は旰食して、日に給するに暇あらず。今、四郊星多く、宜しく人人自ら効すべし。而るに虚談もて務めを廢し、浮文もて要を妨ぐるは、恐らくは当今の宜しとする所に非じ」と。謝答えて曰く、「秦商鞅に任じて、二世にして亡ぶ。豈清言、患を致さんや」と。

とある。義之と謝安の二人が一緒に登った「冶城」とは、当時

の都建康の東南郊にあつた城である。仕事の能率のあげ方を現実的に考えようとする義之は、謝安に夏の禹王や周の文王の精勵さを例にあげて、今日の郊外に星が多く築かれ、外敵が着々と事をすすめているという非常事態への対し方について問題を投げかけている。要は謝安の仕事ぶりを見て、空虚な清談にうつつをぬかして、うわついた文章をもてあそんでいたのでは職務をおろそかにし要務を滞らせることで、全く時宜になつていないと、少々厳しい言い方で親友の謝安に迫まっているのである。しかし、謝安は秦の内情を例に出して答えている。「秦はあの有名な宰相であつた商鞅が登用したにもかかわらず、たつた二代で亡んでしまつた。清談がどうしてもわざわいを招集するののか。」と堂々と語っている。秦始皇帝やその宰相の商鞅は清談をほとんど行なわなかつたのに短命の国だったということとを謝安は力説し、自分が行なっている清談の効を理論的に裏付けているのであろう。この答えに対して、義之は反応はしていない。義之自身は清談はほとんど行なわなかつたので、謝安のことが目についたのであろうか。それにしても謝安と義之の人間の器の大きさの違い、考え方の違いが明確に表現されている場面である。

方正第五61に

王右軍、謝公と阮公に詣る。門に至り、謝に語る、「故よ

り当に共に主人を推すべし」と。謝曰く、「人を推すことに正に自ずから難し」と。

とある。この小話は、羲之と謝安が阮裕を何かのポストに推挙するということで、二人で阮裕を訪問したときのことである。

阮裕の家の門まで来ると羲之は謝安に、「もちろん二人で一緒に阮裕を推挙するのでしょうね」と念を押した。すると謝安は「人を推すことは難しいことだ」と、急に慎重になってしまった。一体これは何を意味しているのだろうか。二人の性格の違いを読みとるべきなのか。人事に関する考え方の違い、慎重さの違いを対比して表現しているのだろうか、理解しにくい所であるが、そもそもこの「方正篇」の「方正」とは、本来は行いにかどめがあり、礼になつていて正しいという意である。漢代には「賢良方正」という評価が官吏を推挙する場合の条件の一つとされていたようである。従つて、この場合の謝安は自分の意志を曲げることなく、気骨のある行為そのものであつて、安易に情に流されることなく、妥協もしないで慎重な態度を羲之に対してとつたということであろう。

雅量第六28に

謝太傅、東山に盤桓す。時に孫興公諸人と海に汎かびて戯る。風起こり浪涌き、孫・王の諸人、色並びに遽て、便ち還らしめんことを唱う。太傅は神情方にさかんにして、吟嘯し

て言わず。舟人、公の貌閑にして意説べるを以て、猶お去きて止まらず。既に風転た急に、狼猛し。諸人皆誼動して坐せず。公徐に云う。「此の如くんば、将た帰ること無からんや」と。衆人即ち響きを承けて回る。是に於いて其の量の以て朝野を鎮安するに足るを審らかにす。

とある。謝安が隠棲して悠々自適の生活(東山に盤桓す)を送っていた頃とは、桓温の司馬になる前、即ち出仕する前で40歳以前の頃である。桓温に仕え、東晋の廷尉卿であつた孫綽と王羲之と、その他数人と海で舟遊びをしたときのことである。天はにわかにくもり、風は強くなり波は高くなつてきたのでとにかく舟を岸にもどそうと大騒ぎになつた。しかし、謝安は平静で詩を吟じたまま何も言わなかつた。船頭は謝安が表情変えることなくのんびりとしていたので、そのまま舟を進めた。しかし、他の人々は烈しくなる風波にますます大騒ぎとなり坐っているどころではない。すると、おもむろに謝安は「それでは引き返すことにするか。」と言つたので、多くの人々はよくぞ言ってくれたとばかり一目散に舟を返した。かくして、謝安の株は上がり、器量の大きい所が認められ朝野の鎮安に十分に役立つことができたという謝安の人間のスケールの大きさを述べている小話である。ここでは羲之は舟を引き返すことを主張した側で、謝安に対抗したのであるが、むしろこの場合は、孫綽や羲之は

普通誰もが考える方向である。謝安は行き過ぎた行為を取えて試みて、それがどこまでできるか実験したいという可能性への挑戦を自分の身をもってしたということである。もちろん誰よりも勇気があり、自信もあり、見識もある謝安のこの計算された行為は、雅量篇の「雅」に相当するものである。即ち、器量の大きさという点では、ときには生命の危険をおかし、切羽詰った時、周囲の人々を気にすることなく、さりげなく上手に事を処理してゆくということなどに見られるのであろう。その処理方法には、生まれもった資質や教養の豊かさが背景にあつて、実に潔く颯爽と行なつてしまうこと、これが「雅」なのである。謝安はまさにこの時命を張つて、荒波の海に出て、何事もなかったかのように帰ってくるという強い生命力を「雅」としてこの小話は表現しているのである。

三

賞誉第八7に

王右軍、劉尹に語る。「故より当に共に安石を推すべし」と。劉尹曰く、「若し安石の東山の志立たば、当に天下と共に之を推すべし」と。

とある。清談の名手で丹陽尹の劉惔（劉尹）は、謝安とは清談仲間であり、論理的で機智に富んだ人物である。そこで、その

力を借りて官界に復帰させようという義之の考えであるが、少々この件については不安のある義之は劉惔の智恵を得て、理論武装をしようということであろうか。「もちろん一緒に謝安を推薦するだろうね。」という義之の言に対して、劉惔は「もしも謝安が東山に隠棲しようという志が確立しているのなら、天下の人々と一緒に謝安を推薦しましょう」と応じている。即ち、謝安が自分自身のことを重んじて隠棲するというような人物なら、天下の人々のことも同様に重んじて愛するだろうから、安心して天下をまかせることもできるであろうという劉惔の論理である。

自分のことを思つて敢えて隠棲しようという人物は、決して平凡な考えの持ち主ではない。気骨があつて、なお大きな夢のある人物であろうと劉惔の目には写っているのである。従つて、劉惔の論理からは、人の上に立つて行なう官界などにはなくてはならない資質と見込んでいるのである。しかし、謝安の官界に出ることの決断はなかなかできなかったが、義之や劉惔のような人格者に推薦されればまた別なのかもしれない。謝安はこのめまぐるしい時代にあつて得がたい人物であることは誰もが認めていて、天下の人々が大いに望む人物なのである。

同じく賞誉第八14に

謝公の王右軍に与うる書に曰く、「敬和は棲託好佳なり」

と。

とある。謝安は羲之にあてた手紙の中で次のように述べて、東晋の呉郡内史、領軍將軍、中書令の王洽（字は敬和、王導の第三子）を誉めている。「敬和は棲託好佳なり」と、即ち、身心のおきどころが素晴らしいということである。「棲」は「すむ」「すみか」「やすむ」などの意、「託」は「よる（依）」「たよる」「やどる」などの意である。従つて、「身心のやどる所」、即ち、「身心のおきどころ」の意となる。そもそも「賞誉」とは「ほめことば」を収録したものである。なお、謝安のほめことば（人物批評の）を上げてみると次のようになる。

賞誉第八63に、「朗は是れ大才なり」、朗は楊朗で字は世彦、楊準の子、西晋の雍州刺史である。

同じく78に、藍田（王述）を称す、「皮を掇れば皆真なり」と。97には、予章（謝鯤）を道う、「若し七賢に遇わば、必ず自ずから臂を把りて林に入らん」と。116には、「劉尹（劉惔）の語は審細なり」と。125には、王脩齡を称して曰く、「司州（王胡之）は林沢の遊に与かる可し」と。128には、安北（王坦之）を道う、「之を見れば乃ち人をして厭かしめざるも、然も戸を出でて去れば、復た人をして思わしめず」と。129には、「司州（王胡之）は勝に造りて遍く決す」と。131には、「阿齡（王胡之）は此の事に於いて、故より太だ厲しくせんと欲す」と。な

お、此の事とは高潔な身の処し方をいう。133には、「長史（王濛）は語甚だ多からざるも、令音ありと謂う可し」と。140には鄧僕射を重んじ常に言う、「天地知無し、伯道（鄧攸）をして児無からしむ」と。鄧攸は戦乱の中で自分の子を捨て、弟の子を救つたという故事により、謝安は「児無からしむ」と言つて鄧攸を深く思い、高く評価している。143には、王孝伯（王恭）に語る、「君が家の藍田（王述）は、拳体常人の事無し」と。とある。楊朗は大才、王述は真、謝鯤は臂を把りて林に入らん、劉惔は審細、王胡之は林沢の遊に与かる、遍く決す、太だ厲しくせん。王濛は令音あり、鄧攸は児無からしむ。王述は拳体常人の事無し、そして王洽は棲託好佳なりとそれぞれ賞誉の表現をしている。

謝安が桓温の司馬として官界に入り、最初に江陵に赴任したのが升平四年（360）で、謝安は四〇歳、羲之は五〇歳を越えていた。『世説』賞誉第八101にその頃の小話がある。即ち、

謝太傅、桓公の司馬為り。桓、謝に詣るに、たまたま謝、頭を梳り、遽かに衣幘を取る。桓公云う、「何ぞ此を煩わさん」と。因りて下りて共に語りて暝に至る。既に去り、左右に謂いて曰く、「頗る曾って此の如き人を見しや不や」と。とある。ある日、桓温が謝安の家を突然訪問した時のことである。不意のことなので謝安はあわてて衣冠を整えようとしたが、

「何ぞ此を煩わさん」、即ち「そのまま!! そのまま!! 苦しゅうない」と言つた所である。そして車を降りるとそのまま一日中、日が暮れるまで話しこんで帰っていったというのである。そのことについて謝安は、囲りの人々に「ああいう人を今までに見たことがあるかね。」と桓のことを誉めて述べている。また同じく賞誉第八102に

謝公、宣武の司馬と作り、門生數十人を田曹中郎趙悦子に属す。悦子以て宣武に告ぐ。宣武云う、「且くしほ為に半ばを用いよ」と。趙俄かにして悉く之を用いて曰く、「昔、安石東山に在りしとき、縉紳敦く逼るも、人事に予あずからざらんことを恐る。況んや今自ら郷選す。反つて之に違わんや」と。

とある。やはり謝安が桓温の司馬になった頃の小話で、謝安の郷里の人材を数十人任用して欲しいという依頼に対し、桓は「半ばを用いよ」と趙悦子に告げた。しかし、趙は桓の言う通りにはせず、全員を採用してしまった。しかし、これには趙なりに趙の考えがあつたのである。即ち、謝安がまだ東山に隠棲していた頃、朝廷の高官たちは謝安の官界への出馬を願つて動いたが仲々応じなかつた。しかし、今度は謝安自身が自分で郷里の人材を推挙してきたのである。これは謝安自身が官界に出ようという気持の現れである。どうしてこの気持をそのまま受けないでいられようかというのが趙の考えである。半分の採用

という命令に対して全員の採用というこの趙の機転は賞誉に値し、またそれを発動した謝安の行動も賞誉により以上値すると考えられる。謝安もいよいよ本氣を出して人々の為に俗界に入り、俗事を処していこうということである。

また、謝安の人物批評についての考え方や主張について賞誉篇に散見できる。まず、146は散騎常侍、左將軍の謝玄(343〜388)

(謝安の甥)が謝安に劉惔の性格についてたずねている。即ち、「真長(劉惔)は性至峭、何ぞ乃ち重んずるに足らん」と。答えて曰く、「是れ見ざるのみ。阿、子敬(王猷之)を見るも、尚お人をして已やむ能わざらしむ」と。

とある。謝玄は劉惔の性格があまりに厳しすぎて心から尊敬するほどのことはないのではないかという問いに対して、謝安は、「尊敬するもしないも彼に実際に会ってみなくては何とも言えない。現に君は会っていないから厳しすぎると思つているのでしよう。(王羲之の子の)王猷之に会ってみると、会う前より以上に心服しないではいられなかつたのではないか」と猷之を例に出して答えている。きつと猷之も劉惔以上に厳しすぎて、会う前と後とでは別人の感があつたのであろう。従つて、ここで謝安が言いたいことは、実際に会つてはじめてその人の性格もわかるのだから、一概に思い込んでほならないということである。

四

また、同じく147には、謝安が中書監に在任中に王珣(350～401)と一緒に登庁したとき、王が遅れて来たので、詰っていた席をあけて坐らせてやった。当時、王氏と謝氏は絶交していたので王はどこ吹く風といった態度であった。そして、家に帰った謝は劉夫人にそのことを話した。「王珣に会ったが、やはりありきたりの男ではない。相関しなくても知らぬうちに心服させられてしまう。」と。一言もかわさなくても眼や行為そのものでわかる所はわかる。

また、同じく賞讃第八148には、東晋の中書令の王献之(344～386)が謝安の性格について語っている。

王子敬(献之)、謝公に語る。「公は故より蕭灑なり」と。謝曰く、「われ蕭灑ならず、君われを道うこと最も得たり、われ正に自ずから調暢たり」と。

とある。献之は謝安のことを蕭灑、即ちさっぱりしていてさばさばしていると評している。そして、それを謝はそのまま受けて、しかも献之の批評の仕方がよいと誉めている。さらにそれに自分でプラスして「調暢」、即ち、のんびり屋やのだと言っている所は、実によい性格の持ち主であり、賞讃に値する内容である。

『世説』品藻第九において王羲之と謝安が会おう小話は、前頁の表1にあるように四話である。「品藻」とは「しなさだめ」の意であり、人物批評に関する話題で特に比較論評が多い。まず、55は許詢と謝安との比較である。即ち

王右軍(王羲之)、許玄度(許詢)に問う、「卿自ら言う、安石(謝安)に何如」と。許、未だ答えず。王、因つて曰く、「安石は故より相与に雄たらん。阿万は当に眼を裂きて争うべきか」と。

とある。謝安と謝万は二謝とも言われる兄弟で、安が兄で万が弟である。万は東晋の撫軍從事中郎、予州刺史、散騎常侍を歴任した。二人は六人兄弟で、長男が謝奕、あとは、玠、安、万、石、鉄で、安は三番目、万は四番目である。

羲之の許詢と謝安と比べたらどうかという問いに、許が答えなかったのも、羲之自身が「安は君と肩を並べる俊雄であるが、万は眼をさいて君を押しつけようとするであろう」と具体的に評している。安と万とを比すれば、安のほうが何かと優秀で器量は上であるが、万は「眼を裂きて争う」というのは、本来実力がそなわっていないので、その時その場で努力して、力を出しきって正面からぶつかっていくというタイプなのであろう。

兄弟でも大きく性格は違うものである。また安と兄の奕とを比較した59をみると、

孫承公(孫統)云う、「謝公(安)は無奕(奕)より清く、林道(陳達)より潤えり」と。

とある。安は奕より清らか、即ち、洗練されており、安は陳達よりしつとりしているという比較の仕方である。安の性格が他の人と比較することによって浮き彫りになってくる。

また、同じく品藻第九62には

郝嘉賓(郝超)、謝公を道う、「膝に造り、深徹せずと雖も、而も纏綿として綸至す」と。或曰く、「右軍は詣る」と。嘉賓之を聞きて云う、「詣ると称するを得ず、政に之を朋と謂うを得るのみ」と。謝公、嘉賓の言を以て得たりと為す。

とある。ここでは桓温の據、参軍で仏教の信奉者である郝超(336~377)が、謝安のことを細かく評している。即ち、「ねばっこくてまといつてくる」ような性格の安であるが、決してにじり寄って膝をつき合わせ、しつこく深く核心を貫くというわけではない。あっさりときっぱりしているという言い方は、前述の王献之が言った「蕭灑」と同じである。そして、羲之のことをある人が「右軍は本質に触れている」と述べていることを受けて、郝超は「本質に触れていると言うよりは、羲之は謝安と同格である」と言っているが、謝安は内心その言葉は当って

いると思つていたのである。また、或る人が言う「詣る」、即ち、「本質に触れている」ということは具体的にどのようなことなのか。生き方の本質に触れているということなのか。しかし、謝安と同格という郝超の見方からは、羲之は本質に触れていないのだから、謝安も同じく本質に触れていないということになる。

次に、同じく品藻第九75に、羲之と献之の父子の書についての比較がある。少し傍若無人の所がある献之が謝安から書について突つ込まれる場面である。即ち、

謝公、王子敬(献之)に問う、「君が書は君が家尊に何如」と。答えて曰く、「固より当に同じからざるべし」と。公曰く、「外人の論は殊に爾らず」と。王曰く、「外人那ぞ知るを得ん」と。

とある。ここで献之は、謝安から父の羲之の書と比較してどうなのかと尋ねられ、その答えとして献之は「当然同じではないでしょう」と言っている。これはどのような意味に解したらよいのか一つの問題である。献之の本心はこの答えの後に、「実は私のほうが優れている」と言いたかったのであろうか。また、「父と同じではない」ということは、両者の間に差異があるということである。即ち、やはり父が上なのだと思つていいのか、それとも父より自分のほうが上と思ひ、同じではないと言つて

いるのか、それとも、上下のことではなく、父の書は父の書、自分の書は自分の書で、それぞれ個性があつてそこに違いがあるということなのか疑問の残る所である。そして、その後の謝安の質問は、「世間の人々の評判は全く違うのではないか」である。ということは、献之は父よりも書の表現力は上であると内心思っていると謝安が感じたからであろうか。

献之は隸書を得意とし、父の書法に工夫を加えて新しい自分の世界を創出したという自信はあるのであろう。従つて、謝安の質問に対して献之は平然と「世間の人々にどうしてわかりましょうか」と、堂々と言い切っているということは、自分のほうが上であるということの日頃から思っているということである。謝安の目からは、世間の一般的な評判は父であり、人格も含めて父が上であるということである。そして、献之の態度や性格から謝安自身は献之に対してひとこと言いたかつたのではないだろうか。一方、献之の気持としては、世評も含めいつも書に関しては父の下に位置していたので、謝安に対しては思ひきつて度胸を決めて自分を出したのであろう。献之の性格がよく表現されている小話である。

また、同じく品藻第九85では、支遁と羲之と王胡之の三者を謝安が評している。即ち、

王孝伯（王恭）、謝公に問う、「林公（支遁）は右軍に何如」

と。謝曰く、「右軍は林公に勝る。林公は司州（王胡之）の前に在れば亦た貴徹なり」と。

とある。まず、三人のうち支遁と羲之の二人を比較してどうかと王恭が謝安に尋ねている。すると謝安は羲之のほうを上と見ている。だがその支遁も王胡之の前に出ると、気品があつて立派であると評している。従つて、この三人では羲之、支遁、王胡之の順になると謝安は言っているが、このような人物比較評はこの品藻篇では多い。謝安はいろいろな人から尋ねられ意見や印象を述べることが多いということは、それだけ人格者であり頼りになり信望が厚いということである。似たような小話を見ていくと、同じく70には、王献之が支遁と庾亮のことを尋ねている。即ち、

王子敬（王献之）、謝公に問う、「林公は庾公に何如」と。謝殊に受けず。答えて曰く、「先輩初めより論無し、庾公は自ずから林公を没するに足れり」と。

とある。謝安はこの問いに対してまともに取りあげずに、「先輩たちははじめから問題にしていない。庾亮の前では自ずから支遁は目立たず影が薄い」とあつさりと謝安は述べている。また、同篇の73では、謝安が王恭に劉惔と王濛のことを述べている。即ち

謝太傅、王孝伯に謂う、「劉尹も亦た奇だ自ら知る、然も

長史(王濛)に勝ると言わず」と。

とある。「劉惔は自分を知ることにはすぐれている。しかしその劉惔が王濛よりすぐれているとは言わない」と謝安は述べている。二人は比較の仕様がないうことであろうか。また、同篇の77に、王猷之と王濛と劉惔を比較している。即ち、

人の太傅に問うもの有り、「子敬は是れ先輩の誰にか比す可き」と。謝曰く、「阿敬は王・劉の標を撮るに近し」と。

とある。ある人が謝安に「王猷之は先輩の誰に比べたらよろしいか」と尋ねた。謝安が答えて、「敬はだいたい王濛と劉惔の高い梢に手が届いていると言える」とある。この高い梢というのは二人の上の部分に到達しているということであつて、二人よりも猷之は上ではないということであろうか。謝安の言葉の使い方の上手な所で、謝安自身はこれを楽しんでいるようである。また、次の78は謝安が王恭に述べている。即ち、

謝公、孝伯に語る、「君が祖(王濛)、劉尹に比するに、故より速ぶを得たりと為す」と。孝伯云う、「劉尹に速ぶこと能わざるに非ず、ただ速はんとせざるのみ」と。

とある。「王濛は劉惔に比べると、もとより肩を並べうる方だ」と謝安が言うと、王恭は「劉惔に肩を並べられないというわけではなく、ただ肩を並べようとしただけです。」と、王恭の祖父に当る王濛のことを自分で述べている。ただ祖父の王濛が

自分の意志で並べようとしないうと云って、その力の有無などに関係はないと暗に言おうとしているのであろう。また、同じく82では猷之が謝安に尋ねている。即ち、

王子敬、謝公に問う、「嘉賓は道季に何如」と。答えて曰く、「道季は誠に復た清悟を鈔撮すれども、嘉賓は故より自ずから上たり」と。

とある。嘉賓(郝超)は道季(庾敳)に比べてどうかと猷之が謝安に尋ねている。「道季はすつきりとした理解を要領よくつかんでいるが、しかし、嘉賓のほうが上だ」と、ずばり迷うことなく自信をもつて答えている。嘉賓のほうがもとより一枚上手だということである。また、同篇の84は王恭が謝安、王濛、劉惔の三人を評している。即ち、

王孝伯道う、「謝公は濃至」と。又曰く、「長史は虚、劉尹は秀、謝公は融」と。

とある。謝安は濃厚で、長史(王濛)は淡泊で、劉惔は秀逸で、またさらに謝安は融通無碍であると王恭が述べている。謝安については言い直しているのは興味深い所である。

五

王羲之と謝安が同じ小話に登場するのは、全部で十一話である。「世説」の全体から見ればわずかな数である。しかし、二

人は王家と謝家のそれぞれの代表格であり、官界での活躍、そして隠棲をも含めた自分自身の為の生き方はお互いによく似ている面がある。年令は羲之が十三歳上であるが、謝安は七年羲之よりも長命であった。その二人の最後の小話が、賢媛第十九26である。「賢媛」とは賢明な婦人という意で、当時の女性の具体的な行動、思考、役割などを描いた、魏晋時代の多角的な女性観の小話を集めた篇である。26の内容は羲之の二番目の息子の王凝之の謝夫人のことである。即ち、

王凝之の謝夫人既に王氏に往きて、大いに凝之を薄んず。既に謝家に還り、意大いに悦ばず。太傅之を慰釈して曰く、

「王郎（王凝之）は逸少（羲之）の子、人身も亦た悪しからず。汝何を以て恨むこと適ち爾るや」と。答えて曰く、「一門の叔父には則ち阿大・中郎有り。群従の兄弟には則ち封・胡・遏・末有り。意わざりき、天壤の中、乃ち王郎有らんとは」と。

とある。王羲之との出会いといってもこれは羲之の息子の王凝之のことである。凝之は謝家の女、謝道蘊と結婚したが、足元を見られたのか、とかく凝之に対して不満が多いようである。まず夫の凝之を軽視している所が問題である。謝家に里帰りした道蘊に謝安は「凝之は羲之の息子だ。人柄は悪くはない。どうしてそんなに不満があるのか」と言っただめている。する

と道蘊は「わたしくの謝家の一門は、叔父には謝安、謝万がおり、いとこや兄弟には謝韶、謝朗、謝玄、謝淵などがおり、皆それぞれ立派です。夫の凝之のようなつまらない人がいようとは思ってもみません。」と、夫を批判している。これが「賢媛」なのであろうかと疑念はあるが、しかし、それほど凝之は夫として問題があるのかということである。この賢媛篇に登場するからには、妻が賢であって、夫は愚であるということは明確であると思つてよいのであろうか。しかし、道蘊は夫ばかりではなく、弟の謝玄に対しても不満をぶつけている。それは同じく賢媛第十九28に

王江州（王凝之）の夫人、謝遏（謝玄）に語りて曰く、「汝何を以てか都て復た進まざる、是れ塵務の心を経るが為か、天分に限り有るか」と。

と厳しく謝玄を攻めている。世俗の務めに心をすり減らしたためなのか、それとも自分自身の才能、天分に限りがあるからなのかという神髄をえぐるような言い方である。即ち、このような鋭い発言ができるということは、多少無礼な所はあったとしても、賢媛という点では取り上げられることは確かである。頭がよく、先を計算する力や見通す力があって、判断力は秀れ、さすが謝奕（謝安の兄）の娘であるということになる。なお、謝道蘊に関して同じ賢媛第十九30に

謝遏は絶だその姉(道蘊)を重んず。張玄は常にその妹を称し、以て之に敵せんと欲す。済尼という者有り、並びに張・謝二家に遊ぶ。人その優劣を問うに、答えて曰く、「王夫人は神情散朗、故より林下の風氣有り。顧家の婦は清心玉映、自ずから是れ閨房の秀なり」と。

とある。道蘊の性格は氣持のさっぱりした方で、おのずと竹林の賢人たちの趣をそなえている女性であるということ。これは当時としては誉め言葉なのであろうか、とにかく竹林の賢女の一人ともあげられる程の才媛である。

また、羲之の郝夫人はこの賢媛第十九ではどのような内容で紹介されているかを見ると、25に郝夫人が二人の弟(郝惜と郝曇)に言っている。即ち、

王右軍の郝夫人、二弟、司空と中郎に謂いて曰く、「王家二謝を見れば、筐を傾け屣を倒にするも、女が輩の来たるを見れば、平平たるのみ。汝復た往くを煩わすこと無かる可し」と。

とある。王家は謝家に対する時と、郝家に対する時と違いがあるようである。郝夫人はそれを指摘している。即ち、謝家の兄弟が見えると衣裳箱をひっくり返したり、履き物をさかさまに履いたり、上を下への大騒ぎでお迎えするのに、郝家のお前たちが訪ねてもどこ吹く風という感じで平氣でいる。もうわざわざ

ざ王家などに来なくてもよろしいとはっきり言っている。このように直線的にきっぱりと嫁ぎ先のことを言えるということは、当時の才女の一人なのであろう。決して間違ったことを言っているのではない。

次に、謝安の劉夫人については同篇の23に、

謝公の夫人、諸婢に幃して、前に在りて伎を作さしむ。太傅をして暫く見せしめ、便ち幃を下す。太傅の更に開かんことを索むるや、夫人云う、「恐らくは盛徳を傷らん」と。

とある。劉夫人は夫の謝安の前で美人たちに歌舞を演じさせ、謝安にはそのさわりをほんの少し見せただけで、即座にカーテンを下ろしてしまった。謝安はもう一度カーテンを開けてくれと頼むと、夫人は「あなたのご人徳を傷つけますので」と言つて二度と見せなかった。人徳は好色によつて傷つけられると夫人は日頃から思っていたのであろうか、計画的にも思えるが、『論語』の子罕篇に「子曰く、吾未だ徳を好むこと色を好むが如くする者を見ず。」とある。徳を好むことと、色を好むことは全く異質のことであり、それをはっきりとわきまえている劉夫人の賢明さはやはり光っている。また、この夫人があつて謝安の人格も輝いているということが言えるのであろう。

さて、本稿は王羲之と謝安の関係を『世説』の小話を通して

見てきたが、まだまだ不十分な面が多々あるように思える。残されたものは次回に送ることにして、前述の表1・2・3は今回の新しい資料である。この両人の関係を考える時に、『世説』に登場する小話数並びに登場人物の数は参考になると思う。王羲之の小話（四十六話）に謝安は十一話に登場して第一位であり、逆に謝安の小話（一一四話）に羲之はやはり十一話に登場し、謝玄、劉惔と並んで第三位である。第一位は十四話の桓温であるが、これは謝安が後に桓温の司馬になったということから予想がつくが、次の第二位は十二話の王献之である。これは予想外のことである。三位との差は一話でたいしたことではないが、謝万、支遁、王濛、謝朗などよりもはるかに献之の小話のほうが多いということは、献之はそれだけ謝安に接近していたということである。父の羲之の書との比較論（品藻第九七）で、献之は大胆なことを言ったので、謝安に厳しく突っ込まれているが、どこ吹く風と平然としていて、少々無礼ではあるが堂々と生き生きとした態度が謝安の眼にはたくましく写ったのであろうか。

今回、本稿をまとめるに当って、王羲之と謝安を中心に見てきたが、息子の王献之が羲之以上に登場しているということは意外であった。今後は献之と謝安との関係に焦点を絞って見ていくという新しいテーマに挑戦したいと思うが、きっぱり真面

目型が羲之だとすると、献之は大胆な面を有し、思い切りがよく妥協などはしないで自分をいつの間にかに通してしまう人物である。それに比して謝安は羲之的な面も持っていて、献之的な面は批判しつつも魅力を感じつつ、どんなことがあっても動揺はせず、喜怒の情も表わさないようなスケールの大きな人物である。それは次の尤悔第三十三4の小話が謝安の性格をよく表わしている。即ち、

謝太傅東に於いて船行す。小人船を引くに、或いは遅く或いは疾く、或いは停まり或いは待ち、又船を放つこと従横、人を撞き、岸に触る。公はじめより呵譴せず。人謂えらく、公常に嗔喜する無し、と。

曾て兄征西の葬を送りて還るに、日暮れ雨駛く、小人皆酔い、処分す可からず。公乃ち車中に於いて、手に車柱を取りて馭人を撞き、声色甚だ厲し。

夫れ水の性、沈柔なるを以てすら、隘に入れば奔激す。之を人情に方ぶれば、固より知る、迫隘の地、其の夷粹を保つを得る無きを。

とある。謝安が東方を船で旅行した、船が思うように動かず、左右に大きくゆれたり岸にぶつかったり、客は倒れたりで大変だったが、その中で謝安は少しも叱責せず黙していた。それを見た客たちは、謝安は喜怒の情を表わさない人だと思った。ま

た、ある時、兄の葬儀の帰途、日が暮れて雨が烈しくなった。
下僕たちは酔って役に立たなかったので、謝安は車の柱を抜き、
それを御者に突きつけて厳しく叱りつけた。

つまり水の本性は柔らかいものであるが、狭い所に流れこむ
と激しく強くなる。これを人の感情にたとえると、どたんばに
追いつめられたときには平静を保てないものであるということ
を説いている。これは一般の人間は平静は保てないが、謝安は
保てるということであり、そこに謝安の人間としての素晴らしさ
があるということである。王羲之がこの世を去る時まで謝安を
尊敬していたのも、このような人間的な魅力があったからであ
ろう。

(付記)

さて、この度、本稿をまとめるに当り次の文献書籍を参照させて
頂きました。最後になりましたがここに記して謝意を標します。

- | | | |
|-------------|---------|-------|
| 世説新語(上・中・下) | 目加田 誠著 | 明治書院 |
| 世説新語(上・下) | 竹田 晃著 | 学習研究社 |
| 世説新語 | 森 三樹三郎訳 | 平凡社 |
| 世説新語と六朝文学 | 大矢根文次郎著 | 早大出版部 |
| 晋書 | | 中華書局 |
| 晋書(和刻本正史) | | 汲古書院 |

- | | | |
|----------------------|-------|-------|
| 隋書 | | 中華書局 |
| 南史(和刻本正史) | | 汲古書院 |
| 宋書(和刻本正史) | | 汲古書院 |
| 王羲之 | 吉川忠夫著 | 清水書院 |
| 中国人の機智 | 井波律子著 | 中公新書 |
| 書道芸術(王羲之・王献之) | | 中央公論社 |
| 書道全集 | | 平凡社 |
| 中国書道史の10人(墨スベシャル28号) | | 芸術新聞社 |

(人文学部日本文学科教授)